

# いのこさんの餅なし里

南部町与一谷

絵：野口宣友



旧暦の10月の亥の日に餅を作つて食べ、安産と子孫繁栄を祈る「亥の子」という行事がありました。この亥の子に関わる話が与一谷にありました。

今から3百年余り昔のこと、伯耆の国(鳥取県)と出雲の国(島根県)の国境の人里を離れたさみしい山の中に、8人の盗賊がおりました。盗賊たちは民家を襲つては、物を奪い取り、村人を傷つけ殺し、大切な牛を殺し、近くに住む村人たちは盗賊たちを大変恐れていました。ある時、盗賊たちは大木峠の近くにある「与一谷」という里を襲つ事にしました。

夜が更けると、盗賊たちは、与一谷の古田藤兵衛の家の戸を「ドンドンドン！」と荒々しく叩きましました。この音に、古田家の者だけでなく隣の藤家の者までゾツとして身を寄せ合いました。

「こんばんは！夜分遅くにすみません。旅の者です、今夜一晩泊めてください」と盗賊たちは戸口で声をあげました。

この時、家の主人で鉄砲の名人の古田藤兵衛は、狩りに出かけてあり留守でした。藤兵衛は出かけ

る時に家族にこう言いきかせていました。「物騒な世の中だけん、万が一盗賊が来たら、酒を飲ませてもてなして、隙を見てわしに知らせてごせ、いいか、決して慌てるな」

それを思い出した隣の藤家の主人の市蔵は、急いで女と子どもを隠れさせ、裏口から古田家に入り、「ああ、そげですか。急なことで、ええもてなしもできんが、どうぞ座敷に上がってごしない」と言つて、盗賊たちを座敷に招き入れました。

市蔵は藤兵衛の息子に藤兵衛を呼んでくるよう言いきかせて、素早く裏口から逃がすと、盗賊たちに「まんず床を後ろに皆さん一列に並んで席についてごしない。こちらの古くからのならわしでありますだ」といつて盗賊たちを一列に並べさせ、酒を注いでまわりました。

市蔵にすすめられるまま酒を飲んだ盗賊たちは、立つこともできないほどすっかり酔っぱらってしまいました。ふと気が付くと、家の中に誰もいなくなっていました。「おい、ここのものはいねえの

か！」と盗賊が言つと、スーと障子があいて、主人の藤兵衛が鉄砲を盗賊たちに向けて立っているではありませんか。

藤兵衛は、村々を襲つた盗賊たちにつらみを込めて鉄砲を撃ちました。藤兵衛は悪い事をしたとはいえ、人の命を絶ってしまったため、大木峠に碑を建てて8人の冥福を祈りました。

藤兵衛が盗賊を退治したことから、人々はこのことを「夜討谷」というようになり、これが訛つて「与一谷」と変わっていききました。

その後、古田家や藤家では悪い事がただたび起き、盗賊たちの呪いではないかと思ひ始めた頃、亥の子の晩に餅をつくお米を蒸しているところからか飛んできた白い鳥がせいゝの上止まりました。この鳥、なんと葬式の棺おけに飾る鳳凰と同じ鳥でした。村人たちはゾツとして、あらためてお坊さん呼び寄せて8人を供養すると、その日を最後に白い鳥は2度と姿を見せなくなりました。

この出来事で、与一谷では亥の子の夜に餅をつかなくなつたという事です。